

11 繰り上げ構文とコントロール構文

英語には、次のような語順を持つ文が広く観察される。

- (1) a. John seemed to be sick.
b. John tried to be a good boy.
 - (2) a. Kate believed John to be sick.
b. Kate persuaded John to be a good boy.
- (1) では主語－動詞－to不定詞の語順を持ち、(2) では主語－動詞－目的語－to不定詞の語順を持つ。(1), (2) のそれぞれで、aとbは統語上異なり、別々の構文として扱うべきであるという証拠が存在する。

一般に、(1a), (2a) は**繰り上げ構文 (raising construction)** と呼ばれ、(1a) ではJohnが下位の位置から主節主語位置へ繰り上がり、(2a) ではJohnが主節の目的語位置へと繰り上がっていると考えられる。一方、(1b), (2b) は**コントロール構文 (control construction)** と呼ばれ、(1b) は主語コントロール構文、(2b) は目的語コントロール構文と呼ばれる。本稿では紙面の都合上(1)の対比に焦点を絞るが、同様の議論が(2)にも当てはまる。

まず、(1a)の繰り上げ構文では、下位の節から上位の節への繰り上げが生じていると考えられる。その証拠は次の文との言い換えから示される。

(3) It seemed that John was sick. (= (1a))
(3) ではJohnが埋め込み節に存在している。この文は(1a)とほぼ同じ意味である。このため、(1a)はもともと(3)に近い構造を持っており、繰り上げが適用され(1a)が生じると考えられる。一方、コントロール構文ではこのような対応する文は存在しない。(1b)に対応する次の文は非文となる。(文頭の*は当該の文が非文であることを示す。)

(4) *It tried that John was a good boy.
このため、(1b)では繰り上げが生じていないと言える。

次に、受動文を使い、繰り上げ構文とコントロール構文の区別を示す。まず、(5)の繰り上げ構文を見ていく。

(5) a. John seemed to have read the book.
b. The book seemed to have been read by John. (= (5a))
(6) It seemed that John has read the book.
(5)のaとbの文は、ほぼ同じ意味を持つ。これらの文のもともとの形が(6)に近いものだとすれば、動詞seemはある特定の出来事（ここでは、John has read the

book) に対する話者の判断を表すと言える。このため、この出来事が (5a) のように能動態で示されようが、(5b) のように受動態で示されようが、文全体の真偽値は変わることがない。一方、(7) のコントロール構文では、この対応関係は存在しない。(7a) と (7b) では明らかに意味が異なる。

- (7) a. John tried to kiss Mary.
- b. Mary tried to be kissed by John. (= (7a))

第3に、it/thereなどの虚辞(expletive) やイディオム(idiom) の一部が現れるかどうかで異なる。

- (8) a. It seemed to be raining.
- b. There seems to be a unicorn in the garden.
- c. The cat seemed to be out of the bag.
- (9) a. *It tried to be raining.
- b. *There tried to be a unicorn in the garden.
- c. ?The cat tried to be out of the bag.

(8) の繰り上げ構文では、主節主語の位置に虚辞やイディオム(the cat is out of the bag) の一部が生じることができる。一方、コントロール構文では (9a, b) のように、虚辞が生じると非文となり、また、(9c) はイディオムの意味が完全に消失し、文字通りの意味しか持たない。

他にも、繰り上げ構文とコントロール構文を区別するいくつかの基準が挙げられる。例えば、(i) 繰り上げ構文とは異なり、コントロール構文の場合に限り、主節動詞と主語の間で選択制限が働く、(ii) 繰り上げ構文ではtoに後続するVPを削除することはできないが、コントロール構文では可能である、(iii) 繰り上げ構文ではto不定詞が意味上、主節動詞と一緒に成り立つと解釈されるが、コントロール構文ではto不定詞は非現実(irrealis)の意味を持つ、(iv) 繰り上げ構文では埋め込みの動詞として状態動詞のみが生起するが、コントロール構文では出来事を表す動詞も可能である、などの点が挙げられる。

最後に、(10) を使い、コントロール構文の派生構造をごく簡単に見ていく。

(10) John tried [PRO to win]

コントロール構文では、繰り上げ構文と異なり、名詞句の移動が生じないと考えられ、主節主語とは異なる要素がto不定詞節内部に生じると仮定される。(10) ではPROと示され、このPROは通常の名詞句と異なり音形を持たない。また、意味解釈は局所的な要素(ここではJohn)により決定される。

(菅野 悟)